

姫島の勝海舟

情報ガイド

目次 CONTENTS

1. 車えびづくし・鯛めん・姫島かれい	7
2. 拍子水温泉	10
3. 姫島灯台	17
4. 自転車レンタル	18
5. 車えびの養殖	22
6. 姫島のお土産	29、30
姫島観光ガイドマップ	15、16
姫島あれこれインフォメーション	
・姫島とは	
・空き缶回収デポジット制度を導入	
・「アサギマダラ」の休息地	
・姫島の主な祭事	
	27、28

姫島観光は
いかがでしたか？

またのお越しをお待ちしております。

HIMESHIMA

- ◆大分空港から伊美港まで車で40分
- ◆JR宇佐駅から伊美港まで車で40分
- ◆JR宇佐駅から伊美港までバスで60分
- ◆伊美港から姫島港までフェリーで20分

元治元年（1864年）8月14日、 勝海舟が姫島にやって来た。



文久3年（1863年）5月、攘夷を唱える長州藩は馬関海峡（現在の関門海峡）を封鎖。渡航中であつた米仏の商船に砲撃を加えた。翌年（元治元年）、海峡封鎖で経済的な損失を受けていた英国は、仏、蘭、米の3国に呼び掛け、長州藩への報復を決定。同時に、軍艦2隻を長州藩に近い姫島の南浦に派遣して報復攻撃に備えた。

同年6月22日（一説には23日）夜、その軍艦から2人の日本人と1人の外国人がボートに乗って姫島に上陸した。日本人は伊藤俊輔（のちの伊藤博文首相と井上聞多（のちの井上馨外相）、外国人はアーネスト・サトウ（当時は長崎領事館書記官・通訳）だった。長州藩が米仏の商船に砲撃を加えた当時、伊藤と井上は英国に留学中だったが、新聞で郷里のことを知り、調停のために帰国したのだった。

調停は失敗に終わり、英国の2隻は去つたが、これに代わって4国連合艦隊（18隻）が西浦沖に投錨。8月5日から6日にかけて下関への総攻撃を開始するに至つた。

これが下関戦争（馬関戦争）である。結果

は、長州藩の惨敗。長州藩は下関戦争で攘夷が不可能であることを知り、その後は軍備を増強して倒幕運動を進めることとなる。

幕府の軍艦奉行であつた勝海舟が、幕府の命令で軍艦順道丸に乗って姫島にやって来たのは、4国連合艦隊に攻撃の中止を求めためだった。当時、幕府は長州藩への攻撃（第1次長州征伐）の準備を行っている最中であつたため、外国が先に戦争を始めるとは不都合なことから勝海舟を送り、4国連合艦隊を説得しようとしたのだ。

勝海舟が姫島に上陸したのは8月14日。つまり、下関戦争が終わって1週間ほどしたころだった。彼はその後、下関に視察に出掛けるのだが、不思議なことに一泊している。なぜ、彼は姫島に一泊したのだろうか。理由は、どの資料にも記されていないので定かではない。8月14日といえば、キツネ踊りなどで有名な「姫島盆踊り」の初日である。もしかすると……。以下の物語は、その両日のことを空想したフィクションである。

勝海舟（かつ・かいしゅう）

徳川幕府の幕臣。名は義邦、のち安芳と改名、海舟は号。旗本の家生まれ、男谷精一郎から直新影流を学ぶ。蘭学と軍艦操術を修めた後、海軍伝習のため長崎へ。1860年、威臨丸を指揮、太平洋を横断して渡米。戊辰戦争では、幕府代表として徳川家存続を条件に西郷隆盛と会見するなど、江戸無血開城に尽力した。

邂逅(かいこう)(出会い)

「庄屋さまー、おおごとじゃあー！」

南浦の漁師が、息を切らせながら庄屋敷に飛び込んできた。

「また異国の船でも来たんか」

「見た目は異国ン船ンことあるが、今度はお武家さまが乗つちよる船

じゃ。それも杵築藩のじゃねえことある」

「ということは、長州さまの船かのう。まあ、どっちにしてもお出迎えに行かならんものう」

羽織袴に着替えた虎二が南浦の浜(現在のフェリー発着場)に到着したときには、すでに多くの島民が上陸したばかりらしい武士たちを遠巻きに眺めていた。

「お役目(ご苦労)までございます。わたくしは姫島の庄屋で、古庄虎二と申します」

虎二は若年の水夫に名乗った。水夫はその旨を上役らしき武士に告げた。その武士は、虎二をもっとも上役らしい武士のもとに虎二を連れて行つた。

「こちらは、軍艦奉行の勝安房守さまであられる」

「はー」

虎二は幕臣、それも高級幕臣を初めて目にした。年齢は40代くらいか、目鼻立ちの整つたなかなかの

とにするよ」

「いやいや、せっかくのお越し。今宵はぜひわたくしの屋敷にお泊まりいただきたいものがございます。さいわい今夜は盆踊りの日でございます、お奉行さまにもぜひご覧いただきたくお願い申し上げます」

「さつきから賑やかな音があるなあとは思っていたんだが、そうかい、今日は盆踊りがあるのかい。それじゃあ見物しない手はねえな。戦場跡は逃げるわけでもなし、船の水夫にもたまには楽しみをやらねえとな。よし、オイラだけおまえんちに世話になることにするよ」

海舟は虎二の人物に興味をもつたのか、あるいは船で寝ることが嫌だったのか(海舟は咸臨丸でアメリカに渡航した経験があるが、その際、船酔いで船室にこもり、指揮をとらなかつたことから同行の福沢諭吉にひんしゆくをかつている)、供も連れずに虎二の屋敷へと向かった。

「なかなか立派な屋敷じゃねえか」

海舟は、虎二の屋敷に驚いた。



男前である。

「古庄虎二つてえのか。名字があるということはおもとは侍かい」

海舟は江戸の貧乏旗本の出であるためか、普段の言葉は江戸弁である。

「は、わが祖先は、戦国の昔、大友家にお仕えしていたことがございまして…」

「ふーん、そうなのかい」

海舟は虎二の顔を上げしげと見つめた。

(庄屋というが、ただの田舎者じゃねえな)

海舟の人物を見る目は優れていた。あの坂本龍馬も、勝海舟という師を得たからこそ歴史に名を残すまでになつたのだ。

そのとき海舟は知らなかつたが、虎二は姫島の傑物と評されていた。年齢は27歳。元田竹溪(杵築藩の藩校「学習館」の教授 門下の俊才で、文武に優れ、義侠心に富む人物だった。

「さつき出張で来ていた杵築藩の役人に聞いたんだが、異国の船の長州への攻撃は終わつたんだつてな。オイラたちは幕府の代表として戦を止めに来たんだが、手後れだったつてわけだ。ま、手ぶらで帰るのもなんだから、これから馬関(下関)に行つてみるこ



姫島庄屋古庄家

第11代小右衛門が天保13年から3年の歳月をかけて完成した古庄家の屋敷。敷地は約550坪あり、一部二階建ての寄棟造りで延建坪は129坪ある。庭園、お成りの間など、旧庄屋の格式を伝える貴重な建物だ。



盆踊り

海舟は虎二の屋敷で休息後、再び浜（現在のフェリー発着場付近）に戻ってきた。

「へえ、にぎやかなもんだねえ。お、狐の衣装をしているのは子どももたな。かわいいねえ」

「はい、あれはキツネ踊りと申します。姫島の盆踊りは、鎌倉幕府のころの念仏踊りから発展したものとわかっておりまして、多くの伝統踊りや創作踊りがございます」

「ほかにどんな踊りがあるんだい」
 「男衆がアヤ棒といわれる青竹を持ち、女子衆の間を縫うように激しく踊るアヤ踊り、また男衆がフグの皮を張った片面の太鼓を持って、女子衆の間を縫うように腰を落とす踊る銭太鼓、優雅な猿丸太夫という踊りもございます」

「どれも楽しそうじゃねえか。なんだかオイラも踊りたくなってきたぜ」

海の幸

「踊りもいいが、ここいらの魚も旨いねえ」
海舟の前には、姫島でとれた海の幸がずらりと並べられていた。
「お奉行さまのお口に合えばよろしいのですが」

「いやいや、大したもんだ。この大ぶりな車えびは江戸でもなかなかお目にかかれな代物だよ。それにカレイもいいねえ。刺身、から揚げ、煮付け、全部うめえよ」
「お奉行さまにお褒めいただき、恐悅至極でございます」

「ハハハ…。こっちこそ、招いてくれてありがとうよ。お前が誘ってくれなかったら、こちとら、こんなうめえもんを口にできなかったんだから」
「この姫島独特の自慢料理『鯛めん』もぜひお召し上がりください」

「こりゃ、珍しい！」
「姫島にはほかにも干しだこ、わかめ、うに、ひじきなどもございますので、お土産としてぜひお持ち帰りくださいませ」

姫島の名前の由来

盆踊りの会場から屋敷へ戻ってきた海舟と虎二は、座敷で再び酒を酌み交わした。

「ところで、この島はなぜ姫島と呼ばれてるんだ」

「姫島の歴史は、古事記・日本書紀にさかのぼります。古事記上巻の国生みの項によりまず、伊邪那岐命と伊邪那美命は、まず淡路島を産み、次に四国、3番目に隠岐の島、4番目が九州と産んでゆき、12番目に女島、またの名を天一根というこの姫島を産んだそうでございます」

「ふむ。して、日本書紀にはなんと？」

「姫島には比売語曾社という社がございますが、この社が日本書紀の巻第六に出てまいります。これによりまずと、垂仁天皇の御代、意富加羅国(今の韓国南部)の王子、都怒我阿羅斯等が黄牛に田器を負わせて田舎に行く、牛がいなくなりました。捜していると、老翁が現れて『おまえの捜している牛は那公が殺して食った』とのこと。阿羅斯等は那公の館に行き、牛の代償を求めます。すると、那公は白石を与えました。阿羅斯等はその白石を持ち帰り、寝室に置くとなんと



姫島かれい

周防灘の潮流と豊かな漁場が育んだ、まるまると活きのいい新鮮な「姫島かれい(まごがれい)」。至上なる味の逸品です。

鯛めん

姫島の結婚披露宴に欠かせない『鯛めん』。新郎・新婦両家のご対面の意味も兼ねているといわれています。



21世紀アルバム



姫島といえば、昔も今も海の幸の料理が最高。特に、車えび料理は姫島ならではのおいしさです。刺身、塩焼き、フライのほかにもシユウマイなどが大好評。車えびのプリプリ感を存分にお楽しみください。



1 車えびづくし

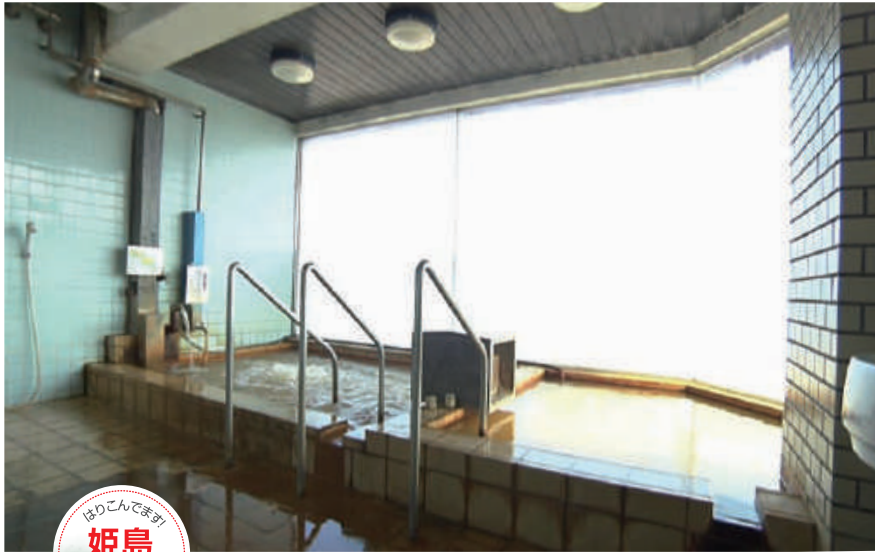


比売語曾社

美女となったそうです。阿羅斯等は大喜んで求婚しましたが、美女は姿を消してしまいました。阿羅斯等が捜しまわると、美女は海を渡って日本国にわたり、比売語曾の神となったとのことでした。姫島の名前の由来はここから始まったといわれています」

「面白いねえ。それで姫島っていうのかい」
「忍れながら、面白いのはこれからでございます。姫島には“姫島七不思議”というものがございまして、そのうちの4つは比売語曾の神となった姫に由来しているでございます。この姫が起こした不思議については、豊後の三重町(大分県豊後大野市)に伝わる真野長者の娘、般若姫が起こしたという説もあるでございます」

「へえ、そのこと自体がすでに不思議な話じゃねえか。なんだか興味が湧いてきたぜ。で、その“姫島七不思議”とやらはどんなもんなんだい」



拍子水温泉

- ◆営業時間:火～金……………正午～午後7時
土・日・祝……………午前10時～午後7時
- ◆定休日:月曜日
- ◆入場料:300円

【泉質】炭酸水素塩冷鉱泉
 【効能】高血圧症、慢性皮膚病、慢性消化器病、神経痛、疲労回復
 ※飲用すると、慢性消化器病、糖尿病、肝臓病等に効能があります。



姫島村健康管理センターの温泉

拍子水の隣には、「拍子水温泉」があります。
 ここでは拍子水の源泉に温水を加えた温泉(41度前後)と源泉(24.9度)の2種類がお楽しみいただけます。
 拍子水は地底から湧き出したときは透明ですが、池の水や温泉は赤茶色になっています。これは鉄分が含まれているため、別名を「赤水」といいます。

七不思議①「拍子水」

虎二も返杯の酒で酔いがまわってきたのか、次第に遠慮が取れ、舌の回転がよくなってきた。

「七不思議の第1は、いま申し上げた比売語曾の神をお祀りしている比売語曾社のすぐそばにある『拍子水』でございます」(15・16ページ参照)

「拍子水つてえと、手を打つと水が湧いてくるとも言うのかい」

「さ、さずがお奉行さま。よくお分かりで」

「あてずっぽうだよ。まさか本当に当たるとはおもわなかつたけどよ、ハハハ」

「言い伝えでは、姫(比売語曾の神)が口をすすぐうとしたところ、近くに水がなかったことから、天に祈りをささげてパチパチと手をたたいて拍子をとると、不思議なことに水が湧き出してきたそうにございます。」

「へえ、そうなのかい」

「もつとも今では手をたたかなくても、

冷泉が湧き出て池の

ようになつておりま

すが。フフフ…」



七不思議②「浮田」

「拍子水から海岸沿いに東に行ったところにも、姫ゆかりの七不思議の一つ『浮田』がございませう」

「ほほう。で、その名の由来は？」

「当時、姫が島民救済のため、池を埋めて稲田を作ったのでございますが、もともとこの池には夫婦大蛇が棲んでおり、池を埋める際に過って雌の大蛇を埋めてしまったそうでございます。そのため田が揺れ、以来浮田と呼ばれているのでございませう」

「雄の大蛇はどうなったんだい？」

「平郡島（山口県）に渡り、その島の池に棲んでいると伝えられております」



七不思議がある場所には、案内板とともに石碑が建てられ、七不思議それぞれを詠んだ和歌が刻まれています。

これは江戸時代後期の小説家、柳亭種彦（初代）の作品です。

種彦が姫島に来た時期は不明ですが、彼の小説『田舎源氏』のモデルは徳川家斉といわれていることから、おそらく勝海舟が姫島にやってきたころと同時期ではないかと思われます。



七不思議③「かねつけ石」

「3番目は『かねつけ石』というもので、これは先ほど申し上げた比売語曾社から西へや行ったところにございます」

「それはどんなもんなんだい？」

「別名を『おはぐろ石』ともいいまして、平たい大きな石がございませう。昔、姫がお歯黒をつけるとき、この石の上に猪口と筆を置いたところ、その跡ができたといわれております」

「固い石の上に軽い猪口と筆を置いたくらいで、跡が残るもんかねえ。そればかりはなんだか信じられねえな」

「まったく左様で。私も子どものころ、その話を聞いたときは信じられませんでした。そこで実際に見に行ったのでございませう」

「で、どうだったんだい」

「確かに、猪口と筆の跡がくつきりと残っておりまして」

「おまえが見たって言うんなら、確かなんだらうけど……。うーん、どうしてそんな跡が残ったんだらう」

「まったく不思議なことではございませう」



七不思議④「逆柳」

さかさやなぎ

「『拍子水』にしろ『かねつけ石』にしろ、その姫はすごい力を持っていたということになるな。それに都怒我阿羅斯等^がつていう王子が一目惚れしたっていうくらいだから、きれいな女性だったんだろうな」

「会えるものなら、会ってみようございますな」

「そうだよなあ。おっと、話の腰を折っちゃったな。すまん、すまん。次は何だい」

「『逆柳』でございます」

「さかさやなぎ？ まさか根が天を向いているっていうんじやねえだろうな」

「ハハハ…。それもおもしろうございますな。戯れはさておき、『逆柳』と呼ばれるゆえんはこうでございます。あるとき、姫が楊枝^{ようじ}を使い、その楊枝を地面にさかさまに挿したところ、楊枝が根を出し、芽を出し、葉を出し、柳の木に育ったそうでございます。しかもこの柳の木、普通の柳とは違って、葉がさかさまになっていることから『逆柳』と呼ばれるようになった次第で」

「そんな不思議なことがあるのかねえ」

「そこが不思議伝説というわけで…」

七不思議⑤「阿弥陀牡蠣」

あみだかき

「あとの3つはどんな不思議なんだい？」

「姫島の東の端の絶壁の下の方には、波による侵食でできた洞窟がございます。この洞窟は人間の鼻のように奥でつながっているのですが、鼻柱に当たる部分に多くの牡蠣がかたまつて、1尺(約30cm)ぐらいの円をつくっております」

「阿弥陀と呼ばれるのはどうしてなんだい？」

「二つ一つの牡蠣が仏像に似ているという説と、牡蠣の集団が阿弥陀如来の船形後光に似ているという説があるからでございます。しかもこの牡蠣、実は海水につかっておりません」

「牡蠣が仏像の形をしているのも不思議だが、海水の届かないところに牡蠣がいるのも不思議な話じゃねえかい」

「もう一つ不思議な話がございます」

「そりゃ何だい？」

「ふつう牡蠣というのは食べればおいしいものですが、ここの牡蠣は食べると腹痛を起こすともいわれっております」

「ほう、それもまた不思議だねえ」



姫島 HIMESHIMA Guide Map

観光ガイドマップ



姫島のご案内

音ベンを聞きたい場所にあててください

姫島村ホームページ
<http://www.himeshima.jp/>
もぜひご覧ください。
(フェリー時刻表なども掲載)



観音崎

七不思議「千人堂」

黒曜石産地 (国指定天然記念物)

観音崎登山道

北浦漁港

城山 海岸寺

(62m)

姫島庄屋古庄家

姫島郵便局

姫島中

姫島小

大帯八幡社

南浜公園

真戒寺

姫島運動公園

フェリーのりば

姫島港

西村記念公園

達磨山 (105m)

清正公社

姫島村営フェリー (至伊美港)

- 会場 (姫島かれい祭/5月)
- 会場 (姫島盆踊り/8月)
- 会場 (姫島車えび祭/10月)

16 ス鼻



400m

丸石鼻



アサギマダラ休息地 (5月頃)

車えび養殖場



二股池

長尾トンネル



焼野岳



迫ダム

大海トンネル



大海ダム



地層褶曲 (県指定天然記念物)



東浦 (大海) 漁港



矢筈岳登山道



展望台



矢筈岳 (266m)



ひめしまブルーライン



ハイタテノ鼻



12 キヤンプ場



13

東浦 (金魚港)



七不思議「かえつけ石」



東浦 (金魚港)



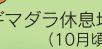
七不思議「拍子水」



拍子水温泉



七不思議「逆柳」



アサギマダラ休息地 (10月頃)



比売語呂社



車えび養殖場



七不思議「浮田」



東浦 (稲積) 漁港



姫島灯台



灯台公園



七不思議



柱ヶ岳鼻

「阿弥陀社」

盆踊り会場

公衆トイレ

ウォーキング&サイクリングコース
18キロ 10キロ

JOYFUL & MYSTERY-ISLAND HIMESHIMA



はりこんです
姫島

4

自転車レンタル



姫島海水浴場

弓状に弧を描く500mの海岸線は島内でもっとも美しいビーチで、休日のひとときをのんびりとお過ごしいただけます。ビーチハウス、トイレ、シャワー室、休憩所も完備。



七不思議めぐりサイクリング
島内観光にはフェリー発着場前にある土産品店でレンタサイクルを借りると便利です。
たとえば、姫島七不思議の1つ「拍子水温泉（15・16ページ地図参照）へは、自転車で30分（約5.5km）ほど。途中の海沿いの道には、海水浴場や車えびの養殖場などがあり、美しい眺めと壮快な風が楽しめます。

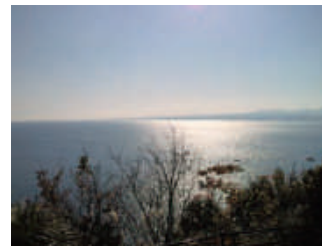


はりこんです
姫島

3

姫島灯台

欧風な雰囲気をもつ建築デザイン
姫島の東端57mの断崖（阿弥陀牡蠣があるところ）の上にある「姫島灯台」は、明治35年（1902年）に、当時の軍の要請で着工しましたが、日露戦争の直前であったためか、工事が遅れ同37年に完成。3月20日に初点灯しました。
使用された機器は、フランス製のソーターハーレス式石油蒸発白熱灯で、日本で初めて使われたものでした。
第2次世界大戦時は、アメリカ艦載機の攻撃をたびたび受け、昭和20年7月4日に休灯。終戦後の21年11月15日に仮点灯、23年10月20日に本点灯となりました。
昭和40年には、本土から海底ケーブルで電力が送られるようになりました。姫島灯台には初点灯以来、灯台長が赴任していましたが、45年4月1日に自動化され無人となっています。
現代では桜の名所として村民に親しまれている一方、観光名所として島外から多くの観光客が訪れています。外国の建築をお手本にした明治時代ならではの建築デザインは、おしゃれな雰囲気さえたえており、記念写真を撮影したくなる場所でもあります。
また、灯台そばの展望台から望む景色は、爽快な気分にくれます。



七不思議⑥「千人堂」

「姫島七不思議の6番目は、『千人堂』でございます。これは島の北にある観音崎の頂上に建つお堂で、馬頭観世音をお祀りしています」

「なんと1000人も人間が入れるお堂があるのかい。でも、そのどこが不思議なんだ？」

「このお堂、広さは2坪ほどしかございません」

「それじゃあ、1000人は無理だな」

「そうなんですよ、言い伝えによりますと、大晦日の夜、債鬼(鬼のような借金取り)に追われた善人なら、1000人入ることができるといいます」

「どうしてそんな言い伝えが生まれたんだろう」

「はて、そこまでは存じませんが、明日、お船で近くを通られたらぜひご覧になつてくださいませ。青い海、緑の松、黒曜石と『千人堂』が調和して、それはもう美しい眺めをお楽しみいただけるものと思います」

「そういうことなら見てみたいな」



七不思議⑦「浮洲」

「最後の不思議は『浮洲』でございます」

「さつき『浮田』の不思議を聞いたが、今度は洲が浮いているのかい？」

「正確に申せば、浮いているように見えるということでございます。北浦の沖合いに広い洲がございます、ここには漁の神様である高部様をお祀りしております。遠浅でございます、春の最干潮のときには歩いて行けるのでございます」

「何の不思議もねえじゃねえかい」

「不思議なのは最満潮のときはもちろん、おおしけのときでも高部様と鳥居が海の水に浸かることがないという点でございます。周囲は広々としているし、特別にここだけが高くなっているようにも思えないのですが」

「そいつは不思議だ。どうなっているんだろう。本当に姫島つてところは、不思議なことが多い島だな。江戸への土産話ができたぜ。それにしても、今夜はおまえに聞いた七不思議が夢に出てきそうだよ。ハハ」

「そうかもしれませぬな(笑)」



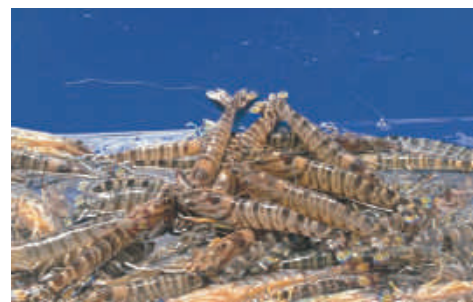


はりこんです
姫島

5

車えびの養殖

塩田跡地を利用して昭和30年代に始められた車えびの養殖は、紆余曲折を経て昭和40年に村も出資する第3セクターの「姫島車えび養殖株式会社」となりました。以来、何度も倒産の危機にさらされましたが、「四面を海に囲まれた水産の村で、車えびの養殖がつぶれたら村がつぶれる」という村当局の強い意志と、新しい養殖技術の導入、従業員の努力でこれを持ち越えました。その後、昭和50年後半から平成の初めにかけては、全国の生産量の1割を占め、東京築地の車えびの価格を左右するまでに成長し、大分県の一村一品運動の代表として「姫島車えび」の名前は全国区となり、村活性のシンボルとなりました。



しかし、平成6年、全国的に広がりを見せしていたウイルスの病気が姫島に伝染。再び厳しい状況が続きました。これに対処するため、会社では新しい養殖技術の入れ替えなどにより、最近では業績が回復してきています。

古庄逸翁と塩業

「ところで虎二、この島の者はなにを生業なりわいにしているんだい？」

「漁師や百姓もおりますが、もともとも盛んなものといえ、やはり塩業でございますよ」

「ほう、塩ねえ」

「姫島では古くから塩づくりが行われておりましたが、本格的に取り組むようになったのは嘉永3年(1850年)に、私の父、逸翁が塩田の拡張工事に取りかかってからでございます」

「先ほどあいさつにみえられたご仁だな。島民のために塩田づくりに取り組むとは、たいした人物じゃねえかい」

「親父はもつと早くから塩田を拡張したかったようでございますが、なにぶんにも資金のめどがつかなかったようでございます」

「それがなぜ、工事をすることになったんだい」

「嘉永3年といえは大嵐が荒れ狂い、各地で大飢饉になった年でございます」

「ああ、そうだった。物の値段は上がり、あちこちで一揆やら打ち壊しが起きたよなあ」

「姫島でも同様に飢饉に苦しんだのでございます。そ



専売所跡地

姫島の塩田は、時代とともに幾多の変遷をへて、明治38年4月には熊本塩務局姫島出張所が開所され、事務所と塩倉庫2棟、そしてこの赤レンガの倉庫が建てられました。

塩田は昭和34年に廃止され、現在は赤レンガの倉庫だけが残っています。平成2年3月、この地は北浦公園として造成され、村民の憩いの場となっています。

んな折に親父が工事を始めたのは、工事をすればお金が島の者に渡るからでございます。親父はこの工事に全財産をつぎ込み、ついには無一文になってしまいました。母や私も塩菰しほももを編んで、その労賃で糊口をしのぐというありさまでした」

「オレも子ども時代の貧乏自慢ならことかかねえが、おまえも苦労したんだねえ」

「それでも親父はくじけることなく、杵築藩の殿様に援助をお願いしたのでございます。その結果、安政6年(1859年)に塩田九町歩(9ha)と耕地2町2反(2.2ha)が完成して、島民の所得は以前の10倍となりました」

「へえ、10倍！ こりゃたまげた」

伊藤博文と井上馨の上陸

翌朝。虎二は、昨夜夜更かししたにもかかわらず、朝早くから家の者にあれやこれやと指図していた。



やがて海舟が起きてきた。朝食を済ませ、2人は姫島港で海舟を待つ船へと向かった。

その日は、気持ちのいい日になりそうだった。2人が屋敷を出てしばらく歩いていると、農家の老婆が庭先で洗濯物を干していた。虎二に気付いた老婆は、ぺこりとおじぎをした。

「庄屋さま、おはようございます」

「おお、婆ちゃん、ひさしぶりやのう。元気にしちよったんか」

「いつとき寝こんじよったけど、もうようになりました。ところで、こつちのお武家様は、初めて見るお顔じゃなあ」

「こらこら、こちらは江戸の偉いお武家様じゃ。失礼があつちやならんぞ」

「ほえっ」

「気にせんでもよい。ところで、婆さんは、異人の船

と長州の戦のことを知ってるのかい」

「知つちよんもなんも、戦が始まる前に異国の人がうちに来てなあ、異国のお金で里芋やら野菜を買っていったんで。そうそう、その人はサトウさんちいう人でなあ、異国にも日本人みたいな名前があるんじゃないあち驚いたわ」

「ばあさんは、異人が怖くはなかったのかい」

「西浦ん沖に18隻も集まつちきたときは恐ろしかったんじゃけどな、サトウさんはウチたちに乱暴せんかったからなあ。ただ、牛の肉を欲しがつちよったけど、『牛やらおらん』ち、嘘を言うたもんじゃから後がこええなあち、みんなで話しよつたんじゃ」

「そんなときは牛をどこかに隠したのかい」

「朝早くに矢筈岳に追い上げて、夜になってから連れて帰つたんじゃ。そういえば、さつき言うたサトウさんちいう異人はなあ、長州のお武家さま2人と異国の船から降りてきたんで」

そのとき、虎二の顔が少し曇った。

「それは伊藤俊輔(博文)さまと井上聞多(馨)さまでございます。なんでも調停のために艦隊の偉い人に会いにいらつしやつたとか。結局、お二人の努力は実らずじまいでした」

「ふーん」

虎二は海舟には語らなかつたが、個人的に長州藩と親しくしていた。姫島は杵築藩(徳川家の譜代)の支配下にあるが、漁師が海路で長州に魚などを売りにいくため縁ができ、庄屋である虎二は長州藩の要人と親しくなっていたのだ。実際、4国連合艦隊が西浦一帯に集結したときは、敵状を書面にしたため長州に送っているほどだ。

しかしながら、幕府と長州藩との仲が思わしくない時節柄、いくら海舟に好感を持ったとしても、幕府側の人間に話すべきことではないと虎二は判断したのだ。

「そんなときなあ、おもしろいことがあつたんで」

「婆ちゃん、調子に乗つちいらんことを言うな」

「まあ、いいじゃねえか。婆さん、何があつたんだい」
「伊藤さまと井上さまは、こん姫島から船で長州にお帰りになったんじゃけど、送つち行つたのは漁師の重蔵と次郎造じゃつた。出発前前の日の夜、次郎造がお米を炊いちな、お武家さまに差し上げたんち」

「へえ、ここいらの漁師は米の飯を食うのかい」

「いえ、それは私が差し入れたものでございます」

虎二は長州藩と自分との仲を海舟に知られるのではないかとヒヤヒヤしていた。

「ウチたちにしたら、お米はなかなか食べられんぞ馳

走じゃあから、重蔵と次郎造はお武家さまが食べ残

したご飯を楽しみにしちよつたんち。お武家さまが食べ終わつた後で、さあ自分たちもおこぼれにあずかるうち思うち、お釜の蓋を開けたんち、そしたら

：アハハ」

「どうしたんだい？」

「お釜の中はからっぽじゃつたち」

「2人で一升の米をいっぺんで食べたつてことかい。そりやすげえな。重蔵と次郎造のぼかんとした顔が目に見えようだぜ。異人との交渉でよっぽど緊張したんだらうなあ」

3人は顔を見合わせ、大笑いした。

後日談だが、明治となり、伊藤博文が首相に、井上馨が外相になったとき、重蔵と次郎造の2人は「へえ、あの大飯食らいが」と大きなため息をついたという。

「お奉行さま、そろそろ参りませんと：」

「おお、そうだな。それにしても長州藩も異人と喧嘩するなんてバカなことをしたもんだぜ。馬関(下関)海峡で戦つたそうだが、これが本当のバカ戦争つてもんだ」

老婆は再び大笑いし、虎二は閉口した。

別れ

2人が南浦に着くと、沖にとめた軍艦から迎える小舟が来ていた。見ると、村人数人が何やら物資を積んでいる。

「ん、何を積んでいるんだ」

「は、村人が申すには、庄屋のいっつけで、この島の特産品を土産としてくれるようでございます。なにやら庄屋とお奉行の間で話はついているということでございますが」

「ああ、昨夜の盆踊りのことか。虎二、おまえ、それで朝早くからござこそしてやがったのか」

「恐れ入ります。どれも姫島の自慢の産物でございます。船のみなさまの分も用意させていただきますので、ぜひ江戸へお持ち帰りくださいますように」

「おお、悪いな。遠慮なくもちろつとくぜ。虎二、何から何まで本当に世話になったな。おまえのことはこの先も忘れねえよ」

「なにかとお忙しいとは存じますが、もしこちらにいらつしやるようなことがございましたら、ぜひ姫島にお立ち寄りくださいませ。その際は、ぜひお奉行さまを姫島七不思議をはじめ、島の名所にご案内しようございます」

●エピソード／

武士になった古庄虎二

慶応2年(1866年)、長州藩は幕府軍を破り、その勢いで豊後の国(大分県)をも制圧しようとしていた。当時、豊後には7つの藩があったが、なかでも姫島を管轄する杵築藩は長州藩の対岸に位置し、藩主は徳川家譜代の家柄だった。長州藩が豊後を攻めるならまず標的とされるのは杵築藩ではないか。そんなうわさが城内はもとより城下にも流れた。幕府軍を破った大藩の長州藩からすれば、わずか3万2,000石の小藩など打ち負かすのはたやすいことだ。

杵築藩の藩主以下重臣たちは、狼狽の色を隠せなかった。

「一刻も早く和議を結ばねば!」

だれからともなく出た声は、すぐに藩論となった。しかし、だれが長州藩との交渉に当たるのかという問題があった。本来なら重臣の中から交渉役を選ぶのが常道だが、この大任を「成功させてみせる」という人物は表れなかった。また、他薦する人もいなかった。

一同の間に重苦しい空気が流れた。そのとき、あ

「そうだな。今度来ることがあったら、ぜひ案内を頼むぜ」

「それはもう…。お名残り惜しゅうございますが、そろそろお別れでございます。この先もどうかお氣をつけて」

「おう、お前も達者でな」

朝日を反射した海は、まぶしく輝いていた。

海舟は虎二の顔を、そして姫島の姿を目に焼きつけるかのように、いつまでも眺めていた。

海舟には予感があった。4国連合艦隊との戦いに破れた長州は、やがて攘夷から開国へと大きく考えを変えるであろう。そして、幕臣としては口に出せないことではあるが、幕府の未来はそれほど長くはないであろう。

その意味で、下関戦争は日本の歴史の中で重要な意味を持つ。もしも4国連合艦隊が長州藩を攻撃しなければ日本はまだ国内で争いを続けたであろうし、多くの人の血が流されたであろう。日本の歴史が大きく変わったターニングポイントの一つが、下関戦争であることは紛れもない事実であり、日本の歴史が続く限り、姫島の名前は永遠に語り継がれていくことだろう。

る重臣がぼつりとつぶやいた。

「姫島の庄屋、古庄虎二はどうだろうか」

「と言いつ出した。虎二が長州藩の要人と親しいのは公然の秘密だった。」

「しかし、いくら長州の要人と親しいといっても、庄屋ごときを杵築藩の代表にするというのはいかかなものか」

「そうは言っても、虎二以外に適任者がわが藩にいないとでもいうのか。庄屋で都合が悪ければ士分にすればよからう。それに表向きは代表ではなく、斡旋役ということにしておけばいいのではないか」

「ふむ。それは名案じゃ」

小藩とはいえ、大名家が藩内の庄屋にすぎるといふのはなんとも情けない話ではあるが、これ以外にすべがない。

いきなり「武士に取り立てる」と言われた虎二もさぞかし面喰らったことだろう。しかし、ことがことだけに、義侠心に厚い虎二は好むと好まざるとにかかわらず、長州藩との難しい交渉を1人で担うことになった。

実は、杵築藩の重臣たちが長州に行くことを渋つたのには、3つの理由があった。第1の理由は、長州藩が北九州の小倉城を攻めたとき、杵築藩は小倉

珍しい渡り蝶「アサギマダラ」の休息地

アサギマダラは渡りをする蝶で、姫島に自生するスナビキソウの蜜を求めて、5月上旬ごろから6月上旬に南方から飛来し、姫島で休息したのち、北の地に向かって飛び立ちます。また、10月中旬ごろ、世代交代した蝶が北から南へ向かう途中、姫島のフジバカマの蜜を求めてやって来ます。



姫島の主な祭事

- 姫島かれい祭り(5月)
- 姫島盆踊り(8月)
- 姫島車えび祭り(10月)
- 姫島ビーチサッカーフェスタ(7月)
- 姫島トライアスロン大会(8月)
- 姫島水上バイク耐久レース(9月)



▲姫島かれい祭り



▲姫島車えび祭り



▲姫島トライアスロン大会



▲姫島ビーチサッカーフェスタ

〈資料〉

『姫島村史』 姫島村史編纂委員会／編・発行

『姫島―その歴史と文化(増補改訂)』

高橋与一／著 発行／大分合同新聞社

城の応援に出兵したこと。第2の理由は、江戸にある長州藩の藩邸を受領したこと。そして第3の理由は、その藩邸の中にあつた祖先廟を焼き払ってしまったことだ。長州藩が優勢となつた今、どれも絶好の攻撃の理由となる。

慶応3年1月、予想通り、長州藩は虎二に対して、これらのことを詰問してきた。

これに対する虎二の回答は、残念ながら、どの資料にも残されていない。ともかく、虎二を斡旋役とした交渉は見事に成功し、杵築藩と長州藩は和親の盟約が成立した。もしも虎二が交渉に失敗していたら、杵築のまちは血の海に染まっていたに違いない。

くしくもその翌年の慶応4年(1868年)、勝海舟は西郷隆盛と交渉し、江戸城の無血開城によって江戸のまちを戦禍から救っているが、虎二はそれよりも先に杵築のまちを救つたのだつた。虎二はこの功績によって、明治元年に、杵築藩から賞状を授与されている。

詩情と伝説につつまれた島

姫島あれこれインフォメーション



姫島とは

姫島村は瀬戸内海の西端、大分県国東半島の北5kmに位置する、周囲17km、面積7.2km²、人口2,469人、世帯数951世帯(平成17年国勢調査)の1島1村の離島です。

全国の自治体で初！空き缶回収デポジット制度を導入

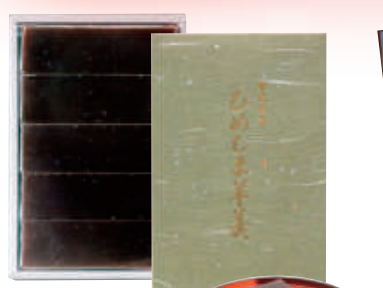
姫島村では、缶飲料を通常の価格よりも10円高い価格で販売しています。缶飲料の購入者は、空き缶を島内の店舗で返却すると10円を返却してもらえます。姫島村ではこのようなデポジット制度を自治体としては日本で初めて1984年に導入。空き缶の散乱防止を図っています。





島人が
手間暇かけて、
ていねいにつくりました。

海産物真空パック



ひめしま羊羹



姫島さざえ



こぎつねもなか



姫島車えびしゅうまい



干しだこ



姫島ひじき

姫島の磯の香りを食卓に。



姫島うに



さかな味噌



えび塩



姫島車えび

6 姫島

姫島のお土産